

聖書：マタイ 11：20～30

説教題：幼子たちに現して

日時：2019年5月12日（朝拝）

今朝はいつもより少し長く聖書のテキストを朗読させていただきました。ここは大きく二つの段落からなっていますので、別々に取り上げることも考えましたが、2つ目の段落の最初の25節は「そのとき、イエスはこう言われた」と始まっていて、この二つの段落は密接に関連しています。そのことに注目して読むためにも、ここを一緒に読む方が良いと思いました。しかし後半のイエス様の言葉は特に有名な言葉で、1回で全部を見て行くことは難しいと思いますので、今日は実質的には26節くらいまでを見て、27節以降は来週もう一度取り上げたいと思います。

まず前半の20～24節には厳しいイエス様の言葉が記されています。このマタイの福音書は11章に入ってイエス様への色々な反応を記しています。特にまず不信仰の応答が中心に書き綴られています。前回見た12節にも「バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、天の御国は激しく攻められています」とありました。また16節でイエス様は「この時代は何にたとえたらよいでしょうか」と言われて、その時代の人々の不信仰について述べられました。そうした流れで今日の20節からイエス様は力あるわざを数多く行っても悔い改めなかった町々を責めておられます。

ここに出て来るコラジン、ベツサイダ、そして23節のカペナウムは、いずれもガリラヤ湖周辺の町々です。コラジンについては聖書の中で他にもう1箇所、ルカの福音書に名前が出て来るだけですので私たちになじみがありません。ベツサイダはペテロやアンデレ、ピリポの出身地で、いくつかのみわぎがそこでなされたことが聖書に書かれています。三つ目のカペナウムはイエス様がガリラヤ伝道の拠点とされた町で、私たちは8章5節以降、多くのみわぎがそこでなされたことを見て来ました。これらの町々が何とあのツロとシドン、またソドムよりも厳しいさばきを受けるとイエス様は仰います。今述べた三つの町はいずれも旧約聖書に登場する町です。ツロとシドンは地中海に面するフェニキヤ地方の商業都市で、その繁栄と傲慢さで知られていました。イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書などで繰り返し非難されています。そのさばきは紀元前4世紀に成就しました。もう一つのソドムについては説明の必要はないかと思いますが、創世記19章に記されている通り、特に性的な不品行のために、ゴモラと共に硫黄の火に

よって滅ぼされました。イエス様はこれらの町々が、やがてのさばきの日にはコラジンやベツサイダ、カペナウムより、まださばきに耐えやすい、すなわち罰が軽いと言われます。なぜでしょうか。それはこのガリラヤの町々はツロヤシドン、ソドムにはるかにまさる恵みと特権にあずかったからです。救い主であるイエス様ご自身がこれらの町々に現れて数多くのみわぎを行われたからです。にもかかわらず彼らはイエス様を受け入れず、悔い改めなかった。従ってさばきの日には一層罰が重いとされているのです。

ここから多くの恵みにあずかった人には、より多くの責任があるという真理を私たちは知ります。ルカ 12 章 48 節：「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。」 ガリラヤの町々は、旧約の町々と比較にならない恩恵を受けました。彼らは主イエス様をその目で見、その言葉、その教えにじかに接しました。また、そのみわぎを見ました。そこに神の国が差し出され、求める人は誰でも入ることができました。しかし彼らは、そこまで差し出されたものをいわば足蹴にしたのです。そういう人はそうでなかった人に比べてより厳しく責任を問われる。このガリラヤの町々は現在、廃墟と化しています。今そうであるばかりでなく、やがての日に、そこに住んでいた人々は厳しく問われると言われているのです。

この話は今日の私たちにも当てはまるのでしょうか。もちろん当てはまります。しかも一層そうであると言えます。ここでガリラヤの町々は責められています。それでも彼らはこの時、イエス様の十字架の死、復活、昇天、そして聖霊の降臨については知りませんでした。一方、私たちは知っています。私たちはキリストの地上の生涯のすべてと、その意味について、はるかに良く見渡せる地点に立っています。さらに私たちはその後の 2000 年間のキリスト教会の歴史も知っています。また聖書を自分で持ち、いつでも開いて読み、学ぶことができる状況にあります。これは今日の箇所に出て来る町の人々に比べれば信じられないような特権ではないでしょうか。だとすれば私たちはそれだけ多くを求められる。なのにもしこの恵みを無駄に受け流すなら、それは自分の将来についてとてつもなく恐ろしいことを意味すると読まなければならないと思います。

これは私たちにとってあまり聞きたくないメッセージでしょうか。しかしこれは福音の大切なメッセージの一部であることを心に留めたいと思います。自動車の運転免許証の更新通知が届くと免許センターや警察署等で講習を受けさせられます。そしてそこでは交通事故の恐ろしい映像を見させられることがあります。ペシャンコにつぶれた車や、

その事故によって思わぬ不幸に投げ込まれた人の話が出てきます。見るたび聞くたびに改めて恐いな～と思います。あるいは高速道路のパーキングでは色々な事故の写真が掲示されています。高速道路だどこまで車は大破するのかと驚かされるような写真もあります。そしてそこにこの事故で何人死亡などと書いてあると、本当に恐ろしい気持ちにさせられます。これは何のためでしょうか。せつかく気持ちよく旅行をしている人たちへの嫌がらせでしょうか。もちろんそうではありません。それは私たちがそこから学ぶためです。もしこれらを見ても、こんな話は心に留めたくないと考え、相変わらず高速道路を突っ走るなら、その人は愚か者です。そういう人は将来、同じような事故を起こしかねないでしょう。しかしもしそこから警告を受けて、そうだ！安全に運転しなくては！と思い直し、正しいあり方へ立ち返らせられるなら、その人は幸いです。イエス様はまさにそのように、これに聞く者がここから益を受けるために、この言葉を語ってくださいました。私たちは多くの恵みにあずかりながら、悔い改めに進まなかったこれらの町々の究極的愚かさとその悲惨を心に留めて、自らを振り返り、正しい在り方へ進むように導かれないのです。

さて続いて 25 節は「そのとき」と始まります。この二つ目の段落でイエス様は父なる神を賛美しています。この 25 節以降は今見たガリラヤの町々へのさばきが語られた後、すぐに語られた言葉です。とすると不思議な感じがしないでしょうか。これまで不信仰な人々のことが語られて来ました。イエス様はその人々の上に臨むであろう厳しさばきを思って、ああコラジン、ああベツサイダと嘆かれました。とするなら、そういう応答をする人々を見てガッカリする雰囲気はここに漂っていてもおかしくないように思います。ところがイエス様はここで天に目を上げて神を賛美しています。イエス様はこうして人々の福音の拒絶という現象を、単なる人間的な視点からでなく、あるいはこの世の視点からではなく、神の視点から、言うならば神学的視点から見ているのです。イエス様がこのガリラヤの町々の福音の拒絶に見たことはこのことです。すなわち「知恵ある者や賢い者には隠し、幼子たちに現す」という神の御心が成就しているということ。目の前でガリラヤの人々はイエス様を信じませんでした。普通ならただ残念だ～と思われるような状況です。しかしこれらの人々の反応によって神の計画が狂ったのではない。むしろその反対です。知恵ある者たちに真理が隠され、幼子たちにそれが現されるという神の御心が実行されている。主権を持っているのは神です。ですからまず「天地の主であられる父よ」と呼びかけられています。想定外のことが起こっているのではなく、神の深い御心がこのように実現している。そのことを見て取ってイエス様は父な

る神を賛美しているのです。これはどういうことでしょうか。

イエス様はこれまで福音を退けた人々のことについて語って来ましたが、その人たちは 25 節で何と表現されているのでしょうか。それは「知恵ある者」でしょう。その人たちは頭が悪くて福音を拒否したのではない。むしろその人々は「賢い者」と言われています。ところがそういう知恵ある人たちがイエス様を拒否して天の御国を悟らないし、そこに入ることもできなくなっている。これはもちろん頭の良い人は自動的に天国に入れなくなるという意味ではありません。聖書に出て来る信仰者の中には、この世の基準で考えても頭の良い人は沢山います。例えばパウロは頭脳明晰な人です。あるいはルカは医者でしたから、彼も優秀な人だったでしょう。ですから高い知性を持つ人が皆、天国に入れられないわけではありません。ここでの「知恵ある者や賢い者」とは、自分をそのような者と自負し、高ぶっている人のことです。自分は知恵を持っている。誰かに助けてもらったり、教えてもらって、それに従わなければならないような愚かな人間ではない。悔い改めるなんて一体誰に向かって言っているのか。信仰や宗教は弱い人間のためのものである。私はそんなものにすがらなくても十分自分の力でやって行ける。私は間に合っています。そう考えている人です。その人はそのプライドによって福音を退けるという応答をする。しかしイエス様いわく、そこで起こっていることは、ただその人が福音を退けているということだけではない。そこで起きていることは、その人に真理が隠されているということである。神が隠すのです。そのため、その人は真理が益々分からなくなる。そして益々自分を誇り、救いから遠ざかる。一見、賢い人々がイエス様と福音を拒絶しているだけのようですが、実際に起こっていることは、神がその人に対して真理を隠すというさばきなのです。人間はしてやったと思っているかもしれませんが、実はしてやられている側の者なのです。

一方の幼子とはどんな人のことでしょうか。これは文字通りの意味よりは、先の知恵ある者また賢い者の反対で、自分をそのようには誇るできない者、弱い者のことです。幼子の特徴の一つは他の人に頼ること、信頼することです。自分にできないことは沢山あります。助けてもらわなければ生きていけないことを体全体で自覚しています。ですから親をはじめとして、自分に助けの手を差し伸べてくれる人の手に素直に信頼します。プライドが邪魔するということがありません。だんだんとそうではなくなって行きますが。そういう幼子はこの世から見れば知識が足りず、弱々しく、価値がない人間だと見下されるかもしれません。しかし幼子のように神に信頼し、心開く者に、神は現

すのです。その人は神の国の真理を良く理解できる者とされるのです。目が開かれてそのことを良く悟り、喜ぶのです。こうしてこの世で知恵ある者と自らを誇って他人を見下している人が神のことが益々分からなくなる一方、この世で見下されている人たちが神のことが良く分かり、天の御国に入る者となるという大逆転が起こる。I コリント 1 章 26～28 節：「兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」

私たちはこの 25 節から、自分は幼子のような者にならなくてはならないと教えられます。18 章 3 節：「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。」 もちろんこれは子どもじみた人になるということとは違います。そうではなく、自分は知恵ある者であるかのような誤った自負を持たないことです。神の助けが必要な幼子のような者と自覚し、神により頼むことです。人間との比較ではどうあれ、神の前で私たちは小さな存在です。赤ん坊同然です。知っていることはごくわずかです。また存在的に小さいばかりか、神の御前に罪深い者です。すべてを見通す神の前で一体どんな面をして自分は賢いなどと胸を張れるでしょうか。むしろ私たちは罪の影響によってあらゆることを捻じ曲げて考えています。決してその判断は公平ではありません。いつも人には厳しいのに自分には驚くほど甘い。相手には言い訳を許さないのに、自分には色々な言い訳をして弁解し、あらゆることを自己中心の観点からいわば歪めて考えています。ですからそのような私たちが考える自己評価など全く当てにならないものです。すべてをご存知の神の前ではどうしようもない哀れな者です。本当にみじめな者です。しかしそんな貧しい者たちを救うために、神は信じがたいことをされました。ご自身の愛する永遠の昔からの一人子を私たちの身代わりとして十字架に送っていただきました。その計り知れない犠牲は神が私を愛し、私の救いのためにしてくださったことだと信じ、幼子のようにより頼むだけで、神は私の罪を赦してくださると福音は語っています。そして神はその者に永遠のいのちを与え、ご自身の子として受け入れ、天の御国に生きる者としてくださる。この恵みにただすぎるだけでいいのです。神は幼子たちにこの素晴らしい救いの世界を現してくださり、その素晴らしい祝福に生かしてくださるのです。

果たして私たちはこの2種類の人間の内、どっちに属する者でしょうか。知恵ある者
また賢い者でしょうか。それとも幼子たちでしょうか。ある人は、自分は知恵ある者で
ある。自分をそう考えてしまっている。だからそんな私ではダメだろうか。神によって
隠されてしまうと恐れるでしょうか。しかしイエス様は28節以降で、「すべて疲れた人、
重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい」と言っています。すべての人に対して、
ご自身のもとに来て真の休みを得るようにと呼びかけています。その声に聞き、心開い
て主のもとに行くなら、そういう人が幼子です。私たちはイエス様の招きに応じて、イ
エス様のところへ行く者でありたいと思います。そういう幼子に神は神の国の真理を現
してくださいます。私たちにそんな力はなかったのに、ただ神が恵みによって、この素
晴らしい救いの世界を私に分かるようにしてくださった。そのことを思って私たちも神
をほめたたえずにいられなくさせられます。そうして益々ご自身の恵みと真理を私たち
に現してくださる神の偉大な祝福の中を歩む者とさせられたいのです。